

蘇州日本租界と片倉製糸

——『蘇州市第一絲廠廠志』抄訳——

山口 建 治

はじめに

二〇〇〇年十月十九日、私たち日本租界共同研究のメンバー三人（大里、孫、山口）は、蘇州大学の嚴明教授（元神奈川大学特任助教授）の案内で、蘇州の旧日本租界の跡地一帯を調査した。旧租界地内にある蘇州金葉絲服裝有限公司を訪ね、旧日本領事館の建物が現在も同社の事務所として使われているのを確認し、その建物の内部と外観の写真を撮らせていただいた。また同社の前身である蘇州市第一絲廠は、日本の片倉

製糸が蘇州の日本租界に作った製糸工場である「瑞豊絲廠」の後身であることを知った。同社には『蘇州市第一絲廠廠志』なる社史があり、それを借り出し一部をコピーすることができた。この社史は、同社の職員が著したおよそ三百八十頁ほどの内部発行の書である（一九八四年四月完成）。専門家ではない職員が書いたものであり、その記述の客観性にはいくらか問題があるかもしれない。しかし、戦前における片倉製糸の蘇州進出について、日本国内の資料では窺い知れない、現地の人々の受け止め方が書かれており、貴重な資料

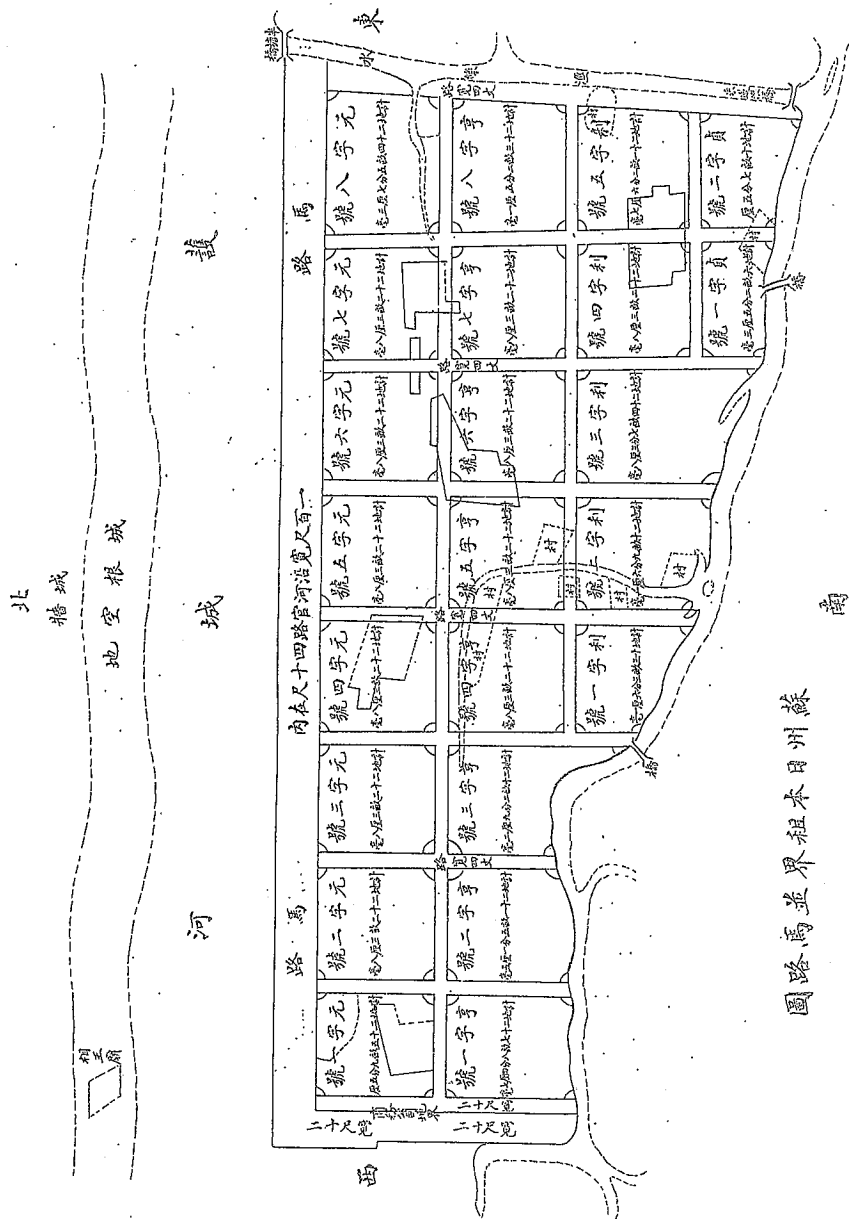
ではないかと思う。そこで、蘇州の日本租界内に設立して経営した日本人による工場の一典型としてこの書の中で片倉製糸に言及することが多い部分（「概述」の一、建廠、二、沿革、「政治篇」の、七章、建國前の労働者の闘い 第一節 日本侵略者占領期、の一部）を訳出し、それに対応する他書の記述を注として引用した。参考にした書は以下のものである。なお、文脈上、明らかに誤字欠字であると判断できるところは訂正して訳したことをお断りしておく。

- ① 費成康著『中国租界史』（上海社会科学出版社 刊、一九九一年）
- ② 社史で見る日本経済史⑧『片倉製糸紡績株式会社 社二十年誌』（ゆまに書房刊、一九九八年）
- ③ 會田三郎著『中国近代製糸業史の研究』（汲古書院刊、一九九四年）

一 工場の設立

光緒二十二年（一八九五年）日本帝国主義者が中国侵略を發動した甲午戦争以後、中国は主権を失い国を辱める『馬関条約』（訳注、下関条約のこと）を締結させられた。光緒二十二年（一八九六年）、蘇州は開港場としてひらかれた。そこは城南の青陽の地に位置し、城壁きわの相王墳の対岸を境界の起点とし、西は商務公司界より東は水緑涇に至るまで、北は運河沿いの十丈官路から南は採運涇までを碑を立てて境界とし、光緒二十三年（一八九七年）三月五日、清政府は蘇州で『日租界章程』を公布した。

- ① 青陽地は盤門外に位置し、もともとこの一帯はひじょうに寂しいところだった。しかし、この地域は蘇州城の南にあり、中国の南北の大動脈である京杭大運河に近く、急速に発展して繁華な区域になる



『江蘇省政治年鑑』(中華民國13年刊)所收

潜在力があつたので、日本人は閩門外の黄金地域を手に入れることができなくなつた時、荒れた墓がいっぱいのこの地区を選択した。(三〇〇頁)

一九〇二年日本政府は日本租界に蘇州領事館を設け、上海総領事館の分館とした。これより日本商人がつぎつぎと日本租界に工場をひらき、企業をおこし、我が国の資源を掠奪し、中国労働者をちよくせつ搾取し奴隷のように酷使した。

我が国の蚕糸の歴史は悠久であり、世界に名を馳せていたが、列強の侵略により、蚕糸業は日増しに衰退し、日本商人は取れる利があると見て、江南の養蚕地に侵略の魔手をのぼし、一九二二年、日本の巨商片倉株式会社の援助により日華蚕糸株式会社(日華蚕糸公司)を組織した。数年にわたる経営の後、事業はしだいに好転した。

一九二四年、日本領事岩崎栄蔵は、租界の市況を繁

栄させるために、租界に工場を建設することを提唱し、片倉株式会社は蘇州の租界地区はすでに明清以来繭の市場に発展していること、蘇州は上海に近く交通の便がよいこと、日本領事館付近は日本事業家の活動の場所であることに気づいた。そこで片倉株式会社は、元の上海瑞豊洋行の經理岡野一希を蘇州・青陽地に派遣して、瑞豊繭行を創業し、繭の買い付け業務を經營させた。

また同年、青島・上海などから一群の建築労働者をつれてきて、日本租界で地形を調査し、土地の測量を行い、最後に水の清らかな蘇杭大運河の河畔、日本領事館の新しい移転先付近に製糸工場の設立を計画した。工場の建物は日本のエンジニア大本亦之助が設計し、同年に鍬入れ、工事にとりかかった。二年間の建築準備を経て、一九二六年五月に正式に生産に入り、日華蚕糸公司瑞豊洋行によって管理され、瑞豊絲廠と工場名がきめられた。

当時、全工場で二つの糸繰り職場と選別、煮繭、復整などの補助職場があつた。糸繰り機械は鉄と木でできた日本の複揺式の小型糸繰り機二四〇台で、それには自動索緒箒がついていて、当時の普通の製糸工場より新しい機械だつた。全工場の労働者が生産する白い機械取り生糸は頤和園牌とよばれ、毎月の産量は六十包（一包は百斤）で、青島に運ばれ、日本人により輸出販売された。その規模は大きく、日華蚕糸株式会社が経営する三大製糸工場の一つになり（ほかに山東の青島絲廠、張店絲廠があつた）、日本資本だけによる中国で経営する初めての製糸工場でもあつた。瑞豊絲廠の創建は、当時浙江の生糸業者に注目された。

⑥ 上海出張所 我社は支那蚕糸業に対しては、夙に明治の頃より大いなる関心を有し、上海には既に日華蚕糸株式会社（現日華興業株式会社）を起し、青島絲廠、張店絲廠及蘇州に瑞玉（ママ）絲廠を経

営し來つた。支那事變勃発後昭和十三年五月上旬戦乱の為、中絶廢頽せる支那製糸業を再興すべく、現地軍部と農林省及日本中央蚕糸会との間に屢々攻究を重ねた結果、中支蚕糸組合が結成された。更に同年八月十日には華中蚕糸株式会社が創立され、日本軍占領地域内に於ける支那人経営の工場及邦人の所有工場を現物出資せしめ、邦人当業者より現金出資を為し、資本金八百万円を以て事業を開始した。茲に於て日華蚕糸株式会社は蘇州工場及張店工場を同社へ譲渡し、従來の製糸に関する業務を廢止して新に日華興業株式会社と改称した。従つて従來日華蚕糸を通じて支那製糸業の経営を行つて來た我社は新に彼の地に直屬の連絡機關を必要とするに至つた。

（二二八頁）

我片倉組に於ては前述の如く既に日清戦争前より支那蚕糸業に着眼し、支那産繭の輸入、製糸経営を試み、爾來如何にしてこの世界無比の大蚕糸国を利用すべ

きかに付て絶えず調査研究を続け、大正五年再び支那産繭の大量輸入を企て片倉勝衛、鈴木格三郎、藤森保方外七名を派遣し小口、石川各製糸工場も加はり、多大の難関を克服して数万貫の原料繭を輸入した。然し支那蚕糸業に関する対策は国策として遂行を要するものがあつたので、片倉組今井五介を中心に渋澤子爵及大日本蚕糸会理事吉池慶正を肝煎役とし、我が有力蚕糸業者を糾合して大正六年五月東亜蚕糸組合を設立するに至つた。組合員四十六名、出資一口一万円とし総出資額七拾五万円に達し今井五介、藤瀬政次郎、茂木惣兵衛の三氏を理事に渋澤子爵、吉池慶正を顧問として支那蚕糸業経営に積極的進出を試みた。

先ず実地研究として、大正六年新糸期より上海の瑞豊及元大兩絲廠約五百釜を賃借経営すると共に、山東省青島に製糸工場を設置し、釜数六百五十釜を以て事業を開始した。他方疲弊困憊により売物続出せ

る上海及其附近の製糸工場を買収し、或は繭資金の投資、購繭出張所の設置、繭蛾廠（副蚕糸、蛹）の経営等に進出した。（二〇一〜二〇二頁）

更に大正十四年（一九二五年）蘇州の日本租界に二百四十釜の製糸場瑞豊絲廠を設立した。此日本租界は蘇州盤門外の東方河辺にあつて其の面積十二万坪、馬関条約に依つて得た我が專管居留地であつたが、久しい間草蓬々たる大広野となり顧るものも無かつたのであつたが、片倉組では考ふる処あつて真先に地所の一部使用の権利を引き受けていたものであつた。（二〇五頁）

二 沿革

一九二六年、本工場が生産に入つてから、日本人は一群の婦人教育係と技術員を日本から転勤させ、もつぱら系繰り技術を伝授させたので、事業は非常に

發展した。一九二九年、坐繰車（糸繰り機）六十台を拡大し、坐繰車は三百台に増加したが、一九三〇年になつて、国外では欧米市場の生糸価格暴落の影響を受け、国内では原料減産の影響により、原価が高騰し停業に追い込まれた。

一九三二年「一・二八」事変（訳注、上海事変のこと）が発生し、日本人は周章狼狽し、多くは上海に逃げていき、本工場は一度管理する人がいなくなる状況におちいった。同年七月、国際生糸市場はしだいに回復の兆しが現れたので、ようやく日本人の小山光弘を工場に派遣し、監視させるとともに繭買い付け業務の責任を負わせ、九月には夏繭を買い付けたが、工場はまだ操業しなかつた。

一九三五年から一九三八年の間は、原料が底をつき、くわえて国外の生糸価格の暴落により、本工場はずつとただ繭を買い付けるだけで操業はせず、日本商人は原料繭を日本に運んだ。一九三七年から一九三八年の

間だけで、倉庫内の千包の繭を全部箱詰めにして日本に運んだ。

この期間、日本商人は瑞豊絲廠を売却しようとし、費達生（一九二一〜二三年に東京高等蚕糸学校に留学して製糸を学び、帰国後故郷江蘇省の製糸業の發展に尽力した）は無錫の乾牲絲廠の工場主程炳若に依頼して買収し、よく整った製糸工場に改造しようとした。瑞豊絲廠の日本商人に連絡をとり、二十四万円で売られることに決まつた。しかし受け渡しする時になつて、土地売買契約書、財産目録などの手続きはすべて整えられたのに、日本商人は突然、絲廠のブランドに「日商」の二字をつけ加えることを要求し、費達生はただちに拒絶したので中止になつた。

一九三七年、中日戦争が勃発すると、北京上海は陥落し、各地の絲廠は武力で占領され、本工場の日本商人はおもに原料を統制することを中心に、劣等の蚕種を發行し、低級な生糸ばかりつくり、我が国の製糸業

を大きく破壊した。

一九三八年三月二十日、売国奴の汪精衛政府が成立し、日本帝国主義は我が国の資源をさらに掠奪し、我が国の蚕糸事業を統制し、同年八月十八日、日本政府は上海で華中蚕糸株式会社（華中蚕糸公司）を成立させ、片倉株式会社は瑞豊絲廠を十五万五千八百五十円の評価出資で、華中蚕糸公司の統一経営に加わった。しかも九月一日には先行して糸繰りをはじめた。その当時、坐繰車を三百六十台、職工九百十八人を擁した。同年十一月二十日、華中蚕糸公司の批准を経て瑞豊絲廠は蘇州絲廠と改名された。また十二月、華中蚕糸公司は該絲廠がもとどおり繭問屋業を行うことを批准し、繭を買い付ける必要のため、帯川式繭乾燥機六台を設置し、繭の乾燥能力を高め、当時、生繭四千三百担を買い付けた。

一九三九年三月、華中蚕糸公司是蘇州に駐在所（事務所）を設けた。日本商人は工場につきつきと倉庫七

棟を建て、収容能力は一・五七万担に達し、大量に物資を貯蔵することにより、該工場を日本軍の中国を侵略し中国の富を掠奪する倉庫にした。

一九四〇年、日本商人は坐繰車を六十八台増設し、全工場合計で坐繰車は四百二十八台になり、新式の繭乾燥機をすえつけ、工場の規模は拡大した。同時に、日本商人はまた戦争前に付属していた蚕種場（まだ蚕を飼ったことはない）を修理して、桑畑をひらき、蚕室を新たに建て、冷蔵庫を設置し、蚕種の冷蔵能力は十万から二十万枚で、蘇州絲廠の付属蚕業場になった。（一九四一年に蚕糸事業の衰退により、該場は停止された。）これが瑞豊絲廠創業以来の全盛時期である。

一九四一年一月、蘇州出張所は蘇州支店（分公司）に昇格し、蘇州絲廠は支店の管理下にはいった。支店長は日本人清水半二が担任し、工場長を兼任した。

抗戦後期に、日本侵略軍の蚕糸事業にたいする破壊により、生糸の生産は重大な損害を受け、当時、蘇州

の三つの製糸工場のうち、ほかの二つはすでに閉鎖し、該工場のみがなんとか生産を続けていたが、生産量は急減し、年産の白機械繰り生糸は五十四トンに達せず、一九四三年初めになって、原料不足により、六十台の坐繰車がまず生産を停止した。同年八月、華中蚕糸公司是解散を宣告し操業を停止した。

一九四四年五月二十日、日本人は華中蚕糸公司を整理統合するため、手口を弄して、うわべだけ改め、上海でべつに中華蚕絲股份公司を成立させ、該公司は中日合弁企業で、資本金は六千万円、中国側と日本側がそれぞれ五〇%出資し、引き続き蚕糸業務を経営し、蘇州絲廠はまた改めて中華蚕絲公司の管理下に入った。まもなく工場長の田島は転勤を命じられて帰国し、改めて魏謀源が工場長に任じられ、実権は□□人の胡田（工務科長）が掌握した。当時、坐繰車は四百台にも満たず、職工数は□百余人にまで減った。この期間、日本商人は蚕糸資源を掠奪するために、一部の坐繰車

を短繊維糸を繰るものに改造し、絹紡の原料用に供し、暴利をむさぼった。（□は不明字）

一九四五年八月十五日、日本侵略軍が無条件降伏してから、日本商人はひきつづき経営する権利を失い、工場はしばらく閉鎖された。

〔附〕

『華中蚕絲株式会社』は華中蚕絲公司と簡稱された。該公司は日本商人が中国蚕糸業を統制し牛耳る機構である。該機構はもとの「中支蚕糸組合」が変質してできたものである。昭和十三年（一九三八年）、日本侵略者は「蚕糸国策会社」の名義のもとで、日本全国各蚕糸独占二十八の事業所を集合、共同出資させ、同年八月十八日、上海四川北路新亜飯店で成立した。鈴木格三郎、平野吉左衛門、李伯勤など三人が理事になった。資金は一千万日本円で、そのうちには一部の売国的商人の投資と日本侵略者に強奪された中国商人の工場設備の換算出資分を含んでおり、両者はほぼ定額

資金のやく三〇%を占めていた。華中蚕絲公司成立の三ヶ月後、十一月七日に「中支那振興株式会社」が設立され、「華中蚕絲公司」は「中支那振興株式会社」の経営事業の一つに改めて属させられた。

一九三九年、華中蚕絲公司是拡張増資され、「中支那振興株式会社」が二百万日本円を出資して、「華中蚕絲公司」の資本に充てた。そこで「華中蚕絲公司」は正式に「中支那振興株式会社」に属することになった。

「華中蚕系公司」は我が国の蚕系の重要産地である江蘇と浙江二つの省の、南京、無錫、蘇州、……など三十近くの市や県に進出した。その下に属する工場は二十一カ所あり、各地に散在しており、全部の職工は約二万人、絲車（糸繰り機）の総数は六千台あまりであつた。その他の小型工場は三百五十カ所あり、絲車の合計は一万三千台である。該公司は一九四三年五月に解散した。

◎ 上海の一部の中国人資本家も巻き込んだ片倉、三井を中心とする中国製糸業への進出ではあつたが、東亜蚕系組合では成立二年後の収支決算で大幅な赤字が生じ、組合員の多くも意欲を失つた。そして一九二〇年の世界的な不況によつて組合は決定的な打撃を受け、改組のやむなきに至つた。成立当初から、製糸家、売込商、そして輸出商という利害を異にする組合員の構成を危惧する声があつたが、日華蚕系株式会社への改組にあつて大部分の組合員は離脱し、改組後は片倉が中心になり、山東を拠点に中国での製糸工場の経営にあたることになった。日華蚕系は山東省内では青島と張店で製糸工場を経営し、また蘇州でも瑞豊系廠を経営した。（二四〇頁）

政治篇 第七章 建国前の労働者の闘い 第一節
日本侵略者占領期

一九二七年（原文は一九四七年だが、前後から考えで改める）四月、日本帝国主義は中国革命の高潮のなかで砲艦政策をとり、漢口で大虐殺を行い、全国人民の憤怒を引き起こし、日本租界の回収を一致して要求した。十日午後三時、在蘇州の居留民は領事の命令を奉じて、蘇州を離れ上海に行き帰国しようとし、日本人が開いた工場、商店はみな十二日より営業を停止した。同日、工場主は労働者の賃金を未払いにしたまま、すべての動産をたずさえ船に乗り蘇州を離れ上海につき、数百人の労働者を放置しようとしていた。労働者はそれを聞きつけただちに日本の職工頭を取り囲み、未払い賃金を支給するように要求した。

当時、蘇州市の総工会が乗り出し調停し、工場主側が賃金を支払うことを認めたが、一部の工場主はすでに蘇州を離れていたため、労働者はやむをえず日本の領事に援助を求めた。しかし日本領事の岩崎は日本籍の警察犬を使い武力で労働者をおどしたので、労働者

のピケ隊は銃器を引き渡すことになり、それは瑞豊工会から総工会にわたされ、総工会から公安局にわたされて保存された。

その時、蘇州市の党機関、市総工会、農民協会および各界の大衆はつぎつぎと集会を開き、宣言を発表し、わが工場の労働者の闘争に声援を送り、日本帝国主義の罪行を糾弾し、日本租界を回収することをつよく要求した。その日の午後、日本の領事岩崎栄蔵は車に乗り上海に行き、白崇禧にたいして労働者が騒ぎを起したと誣告した。十一日、白崇禧は蘇州駐屯の第十独立旅団の旅団長張鎮に二度電報を打ち、兵を派遣して「日本居留民の安全を保護」させ、労働者が接収した銃器を日本人に返還させた。ここに国民党反動派の醜い面目があまるところなく暴露されている。

④ これら租界の第三の発展時期は一九二七年にはじまった。それは租界の衰亡時期でもある。この時

期がはじまる最初、九江・鎮江のイギリス租界は中国政府により回収され、蘇州などの地の三つの日本租界も窮地に陥った。その原因の一つは、中日關係の悪化にともない、日本政府はしばしばそれらの租界から居留民を撤退させざるを得なかったからである。蘇州・杭州は中国の内地に位置し、日本政府は軍艦を派遣して「保護」するわけに行かず、ひとたび騒ぎが起こると、日本の居留民はやむなく上海などの地に引き上げざるを得なかった。蘇州の日本租界についていうと、一九二七年から一九三三年の六年間に、租界の日本居留民は少なくとも三回撤退している。一回目は、一九二七年日本軍が漢口の日本租界で「四三惨案」を引き起こした後である。二回目は、一九三二年初め上海で淞滬抗戦が爆発した際（訳注、「一・二八」事変、つまり上海事変のこと）である。第三回目は、一九三三年初め日本軍が熱河を侵攻した後である。（三〇五頁）